「竹村 京　うごくせかい」作品解説
2026 年 7 月 25 日（土）− 2026 年 10 月 12 日（月・祝）
水戸芸術館現代美術ギャラリー

注：[ ] 内の数字は会場マップの番号です。

《A.N. のリビングルーム、地震の予感》、《There and Now: Kimi shini tamou koto nakare 2》［1］

この展示室では、2000 年代から現在にいたる竹村の創作を紐解く手がかりとして、2006 年に開催された国際芸術祭「第 15 回シドニー・ビエンナーレ」の出品作品の一部を展示しています。

《A.N. のリビングルーム、地震の予感》は、友人の幸せな生活を写し取り、地震にも負けない保管の方法として布に縫い留めた作品です。日用品が刺繍された薄い布越しに、リビングルーム（2 階部分にあります）の様子が透けて見えています。

《There and Now, Kimi shini tamou koto nakare 2》は、イラク・バグダードで起きた市街地戦を撮影した写真がもとになっています。現地に居合わせた友人から送られてきた不鮮明な画像をもとに、友人が見たかもしれない風景を手繰り寄せるように、また、その人の安全を祈るような気持ちで街路樹（ナツメヤシ）や炎を黒や赤の色糸で刺繍しています。

2000 年に日本からドイツへ移住した竹村は、揺れや壁のひび割れに対する日本の友人の反応や自身の感覚の変化に、地震や物が壊れることへの文化の違いを感じたと言います。また、さまざまな国や地域の価値観が交わる「駅」のような場所としてのベルリンでの出会いが、私的なつながりから他者や世界のうごきへと接続する創作の可能性を開いていきました。

絹糸について

壁いっぱいの大きな作品から手のひらに収まるくらい小さな作品まで、大きさの大小に関わらず、竹村の作品には絹糸が用いられています。竹村は、1300 年前に作られた刺繍作品《天寿国曼荼羅繡帳》（7 世紀）と出会い、経年に耐える絹糸の強靭さを感じたそうです。絹糸は、カイコという蛾の繭から人間が糸を引き出して加工したものです。竹村が使うのは絹糸のなかでも捻りのない「釜糸」で、光を受けると美しい光沢を見せるのが特徴です。カイコの糸は人間の肌や髪とも近い組成だと言われており、主成分である動物性タンパク質（フィブロイン）の構造が独特のツヤを生み出します。絹に触れたことのある人は、その肌触りや温かさを思い出してみてください。その感覚の記憶が、親しい人物や個人的な出来事に着想し、壊れた部分に触れたり記憶を留めたりする竹村の作品を知るヒントになるかもしれません。

「修復された…」［1］［2］［4］

竹村は、壊れた物を作品のなかに留め、その存在や出来事に向き合う自らの表現を「修復」と呼びます。ドイツで生活しはじめたころ、竹村は自ら設置した洗濯機が招いた事故によって、その上に置いていた食器を割ってしまいました。その時、近くにあったカーテン生地で壊れた物を集めて包んだというとっさの行動から、さまざまな「壊れ」に向き合う「修復」が始まったと言います。竹村自身や家族、または他人から譲られて竹村のもとにやって来た壊れた物は、薄い布に包まれることで、バラバラになることなく、「壊れることを体験した貴重な存在」として、想像や想起を生み出す作品へと生まれ変わります。ひびに沿って並縫いしたもの、布で覆いざっくりと仮留めしたもの、布越しに見える特徴を刺繍して浮き上がらせたもの…… 一つひとつの「壊れ」と対話するように、作品ごとに異なる「修復」が施されています。

蛍光シルクを用いた「修復」の作品について［4］［5］［6］

青色の LED 照明に反応して鮮やかに発光する蛍光シルクは、カイコの遺伝子にオワンクラゲの緑色蛍光タンパク質を組み合わせる遺伝子組み換え技術によって生まれた素材です。黄色いアクリル板越しに見ることで、蛍光部分がいっそう際立ちます。竹村は、荷物の梱包材として使われていた『繊維新聞』の紙面で偶然この新しい素材を知り、絹糸で「傷口（壊れた部分）に光を与える」自身の作品との親和性を感じたと言います。

カイコは、人間が絹を採るために数千年かけて野生の虫（クワコ）を飼い慣らし、家畜化した生き物です。幕末以降、養蚕・蚕糸業は日本の近代化を後押しする重点農業・産業とされ、遺伝学的研究によるハイブリッド品種の普及に後押しもあり、最盛期（1929 年）には 220 万戸以上の農家がカイコを育てていました。茨城県にも蚕影山信仰や金色姫伝説など、古くから養蚕にまつわる地名や逸話があります。ご家族がカイコを育てていたという方や、近所に桑の木が生えているという方もいるのではないでしょうか。※

蛍光シルクは、一定期間光を当てると、化学反応によって分子が不安定になり光る力を失います。そのため、蛍光シルクを用いた「修復」の作品は、会期を通して繰り返し「修復」し続けることを竹村に求めます。その性質はあたかも、自力では捕食も環境への順応もしないカイコの揺らぎやすく不安定な生を擬えているようです。

※この着眼点は、展覧会連動ワークショップ「蚕を育ててみよう」から得ました。また、会場で流れている音は、ワークショップを企画した教育プログラム・コーディネーター Y.N. によって育てられたカイコが桑の葉を食んでいる音です。

《オープニングのためのカーテン》［3］
《オープニングのためのドア》［5］

《オープニングのためのカーテン》は、竹村がベルリン大学在学中に発表した作品です。往来の要所となる通路を布で塞ぎ、人の流れを変えるこの作品は、展覧会の最初の来場者がここを通過する際に、竹村によって切り裂かれました。一方、《オープニングのためのドア》は、東京の自宅が取り壊される際に竹村が引き取ったもので、展覧会「長島有里枝×竹村京 まえといま」（2019 年、群馬県立近代美術館）でのパフォーマンスにも登場し、「次の場所に向けてオープンする」という象徴的な作品として登場しました。本展では、ドア全体が布で覆われ、ドアノブに沿って蛍光シルクが縫いつけられた状態で開かれる瞬間を待っています。

《修復された N 半島の屋根瓦》［6］

本作で修復されているのは、厳しい自然環境から人々の暮らしを守ってきた屋根瓦です。瓦の欠けた部分に沿って古着を補い、布の上から蛍光シルクの糸で縫い合わせています。瓦の欠けた面積を補うようにびっしりと縫いつけられた糸が青色や緑色の照明に反応し、光を放つことで、瓦片の存在が闇に紛れてしまうほどです。

能登瓦（能登の黒瓦）と呼ばれるこれらの瓦は、塩害や風雪といった北陸の厳しい自然環境に適した瓦として奥能登の民家などで使われてきました。2 年半前に起きた地震を契機に、揺れによる落下だけでなく、被災した家屋の解体作業のため、やむを得ず廃棄されるに至ったと言います。竹村は、頑強な能登瓦の重さを「頭蓋骨」に喩え、災害に伴うさまざまな葛藤に触れながら、瓦に「修復」を施すことでその傷ついた存在に光を与えます。

本展で披露される能登の瓦を用いた新作は、能登半島地震によって生じた九谷焼や珠洲焼のかけらを素材として用い、工芸家やアーティストの技術によって新たな表現の可能性を探求する Rediscover project by CACL による制作協力により実現しました。

制作協力：国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構、群馬県産業技術センター、株式会社 CACL

《May i enter?, all things move》［7］［8］

「May i enter?」は、刺繍によるインスタレーションや「修復」の作品と並行して竹村が 2000 年代に始めたパフォーマンス作品です。モデルとなる特定の人物の日常生活を観察し、一連の動きを自らの中に取り込んで演じることで、ありふれた振る舞いや所作から人物の本質にある文化や規範の集積を表出させます。この作品の展開として、2023 年に参加した「ホーム・スイート・ホーム」（国立国際美術館で開催後、2024 年丸亀市猪熊弦一郎現代美術館に巡回）では、一般の参加者を演者として招き入れた《入ってもよろしいですか？シーン 1, 2, 3, 4, 5》（2023 年）を上演しました。さまざまな「壊れ」の瞬間を再演するこの作品は、人為による意図的な破壊を繰り返し目撃することで麻痺していく「壊れ」に対する感覚を、経験によって再び身体に呼び起こす試みといえます。

これらの作品に続く《May i enter?, all things move》では、宙吊りになった 16 枚のガラス板が、人の手で発生させる揺れにより、床に置かれた布の上に落下します（会期中 3 回上演し、作品の形態が変化します）。落下したガラスは竹村によって布に包まれ、壊れた部分に「修復」が施され、インスタレーションの一部として展示されます。2000 年代から触れてきたさまざまな「壊れ」やそれらが示唆する文化や価値観への探求を引き継ぎながら、本作は展示室という空間において、地震の予感や「壊れ」を観客とともに体験する機会を生み出します。

お母さんたちのポートレイト［9］

自然光がふんだんに注ぐ展示室に、7 点の作品が吊られています。透け感のある布の上に絹糸が縫いつけられ、その下には竹村の家族が使ってきた布がパッチワークのように縫い合わされ、絹糸をいっそう際立たせています。竹村は、自身が妊娠した姿をモチーフとした《Unknown Mother》（2009-2011 年）という作品を制作した際、自分と子どもとが見えない糸でつながっていて、産まれてからもしばらくはその糸で互いを意識できるような感覚があったと言います。これらのポートレイトのモデルは、いずれも近年母親になった竹村の友人や友人の友人です。ところどころ激しく縫い重ねられ、あるいはほかの糸を飛び越すように画面上を走る大胆な糸の筋と、人の動きや風になびく布の柔らかさが、未来につながるもののもつ生動感を捉えています。

Time counter［10］

2019 年から 5 年間かけて、一定の幅で運針を続けて画面を作り上げた作品です。この作品に着手した当時、竹村は家族とともに暮らした東京の家に関する作品に取り組んでいました。画面左側の数列に使われている糸はその家が取り壊される際に家とともに倒されたイチョウの幹で染められており、本展には出品されていませんが、竹村の実家や父親に関する同時期の作品にも用いられています。また、ところどころに使われている淡い色彩の糸は、日本の伝統芸能の衣装に使われる糸だと言います。それぞれに異なる意味や趣をもった糸の色によって作者の折々の気持ちの変化や揺らぎを表した作品は、向き合う位置や明るさの変化によって異なった様相を見せ、まるで日々刻々と移り変わる世界のあり様を映し出すようです。